

(二三、39・1) 8

万葉女流歌人―その愛の一面― 青木生子

国文学(九一、39・1) 7

題詞の権威―旅の歌の一解釈― 伊藤 博

万葉(五、39・1) 15

上代における美の認識 森田康之助 芸林

(五一、39・2) 18

伝説歌の源流 伊藤 博 国語・国文(三三、

三、39・3) 15

万葉人の世界観―デーモンと夢について―

森本治吉 国文学(九四、39・3) 10

旋頭歌と難訓歌 神田秀夫 国語と国文学

(四一五、39・5) 9

万葉集 犬養 孝 国文学(九八、39・6) 6

譬喩歌と寄物陳思歌―衣服の色彩をとおして

みた―伊原 昭 上代文学(六、39・6) 9

万葉集卷十四と挽歌 桜井 満 上代文学

(六、39・6) 7

「かけ」の話 土橋 寛 美夫君志(七、39・6)

9

原万葉―卷一の追補― 中西 進 美夫君志

(七、39・6) 19

万葉解放の二面 松田好夫 美夫君志(七、

39・6) 8

万葉集と現代人 高木市之助 美夫君志(七、

39・6) 10

万葉集はよめるか 亀井孝 美夫君志(七、

39・6) 8

恋情発想と昔―民謡化の一典型― 桜井 満

美夫君志(七、39・6) 8

万葉集卷第一、二の含む機制 太田善磨

国語と国文学(四九、39・9) 12

上代伝承試論―聖徳太子片岡説話をめぐって

―高 壮至 万葉(五、39・10) 21

国見歌の伝承と展開 高崎正秀 国学院雑誌

(六五二、二合併号、39・11) 19

天武殞宮の文学史的意義―諫と挽歌の関係を

中心に―吉田義孝 国語と国文学(四二、

39・11) 9

万葉集卷十四の追補 桜井 満 文学・語学

(三四、39・12) 11

万葉集における歌詞の異伝 曾倉 岑 国語

と国文学(元九、36・9)

万葉集「筑前国志賀の白水郎の歌十首」考

(一) 池田 毅 歌と評論(三二、36・10)

3

万葉歌人の伝承精神 岡田松之助 文芸研究

(三九、36・10) 7

仮説からの出発―万葉集題詞の問題―

久米常民 美夫君志(四、36・10) 12

二 語法・訓詁

万葉集の訓義 藤井信男 文学(二三、20・

10) 3

「よき人」の語義―特に能仁・能人の義につい

て―白石大二 国語と国文学(三二、21・

2) 6

「雲根火雄男志等」について 中島光風 文学

(四・五、21・5) 3

万葉集戲書の出典 水野駒雄 国語と国文学

(三・七、21・7) 2

尙る船木 佐伯梅友 国語・国文(五・六、七

合併号、21・9) 11

「歌」小稿―現象学止揚の前提として

北山正通 国語・国文(五・八、21・9) 20

上代国語における「靡」の「靡状」「れ」の研究

森 重敏 国語・国文(五・八、21・9) 21

莫囂円隣之の訓 塩谷 賛 文学(四・二、

21・11) 3

母にさはらば 佐伯梅友 短歌研究(四・

22・1、2) 4

「うせみ」の語義について 大野 晋 文学

(五・二、22・2) 8

上代係助辞論 森 重敏 国語・国文(一六・

二、22・4）66

訓点語の性格 遠藤嘉基 国語・国文(七・

23・2) 20

修飾語格小見(一) — 上代の助辞「な・に・

の・が」— 森 重敏 国語・国文(七・

23・2) 11

上代における希求表現について 浜田 敦

国語・国文(七・二、23・2) 26

「やか」「ちか」について 阪倉篤義 国語・

国文(七・二、23・2) 6

上代における願望表現について 浜田 敦

国語と国文(五・二、23・2) 19

修飾語格小見(二) — 上代の助辞「な・に・

の・が」— 森 重敏 国語・国文(七・三、

23・5) 27

修飾語格小見(完) — 上代の助辞「な・に・

の・が」— 森 重敏 国語・国文(七・四、

23・6) 35

万葉集訓詁私按(五) 沢瀉久孝 アララギ

(四・六、23・9) 3

「或」作「一」の一群 小島憲之 国語・国文

(七・六、23・9) 3

上代国語における所謂「約音」について

岸田武夫 国語と国文学(五・三、23・12) 12

天「アメ」 武田祐吉 解釈と鑑賞(四・三、

24・2) 4

柿本人麿訓詁新見(四) 大野 晋 国語と国

文学(三・二、24・10) 9

万葉最難訓歌考—万葉巻第一の九番「莫置円

隣之大相云兄爪謁氣」の歌の訓解考—

浜田坂牛 富士(四・二、25・2) 4

柿本人麿訓詁異見—語の意味の歴史的再建の

限界に対する反省として— 亀井 孝

国語と国文学(七・三、25・3) 12

万葉集における「ず」の表記の特色とそれよ

り導かれる種々の問題 田島光平 国語と

国文学(七・三、25・3) 17

射等籠荷四問—万葉地名における同格の助詞

「の」および「が」の用例などについて—

鈴木真咲 文学(六・六、25・9) 6

「乱友」追攷 沢瀉久孝 国語と国文学(七・

二、25・11) 6

万葉人の文字表現—助字の訓詁をめぐって—

小島憲之 芸林(一・五、25・12) 9

莫置円隣之の歌の訓 伊丹末雄 心の花(五・

三、25・12) 3

「其故」—万葉のことば— 佐伯梅友 国語・

国文(三・二、26・1) 10

人麿集訓詁二題 沢瀉久孝 国語・国文(三・

一、26・1) 7

和平可豆佐禰爾母試解 橘 宗利 日本文学

教室(六、26・1) 4

万葉「はなり」の髪考—伝承歌における語義

の誤解について— 吉永 登 関西大学文

学論集(一・一、26・3) 12

さね・かつて考—万葉語彙— 佐竹昭広

国語・国文(三・六、26・8) 8

「中止」考 真鍋次郎 国語・国文(三・六、26・

8) 7

「飽きたらに」 沢瀉久孝 説林(三・九、26・9)

3

序詞句格補説—「渡津海乃豊旗雲爾伊理比沙

え」— 森 重敏 万葉(一、26・10) 8

「莫置円隣」の歌訓詁私按 沢瀉久孝 万葉

(一、26・10) 7

万葉集の助詞「が」「の」の或る場合

西宮一民 万葉(一、26・10) 6

「心開而」の訓について 山崎 馨 国語と国

文学(元・二、27・1) 7

「甚」字の訓について 武智雅一 万葉(三、

27・1) 8

卷十六「饌具雜器」をめぐって 橋本四郎

万葉(三、27・1) 5

条件法における仮定確定の呼応の存否とそれ

に関する万葉集の訓詁私見 木下正俊

国語・国文(三・三、27・3) 21

万葉集動辭攷断章—憶寸吾者と念来吾者と

— 鉄原鉄雄 芸林(三・三、27・4) 5

万葉訓詁断片—あたゆまひ・ことよりの・い

もがここり— 大野 晋 万葉(三、27・4) 7

万葉仮名の読み方 森本治吉 解釈と鑑賞

(七・六、27・6) 3

東歌研究―語法研究による若干の新解―

後藤興善 国学院雑誌(三三・三、27・6) 10

奈良時代における連体助詞「ガ」「ノ」の差

異について 青木伶子 国語と国文学(二・九、

七、27・7) 11

万葉集「老師の花」の歌に於ける「麗」と

「石蒜」に就いて 山口隆侑 短歌雑誌(六・

七、27・7) 4

億良の貧窮問答のうたの訓ふたつ 亀井孝

万葉(四、27・7) 5

万葉集の用字―「去来」のこと「天漢」のこ

となど― 神田秀夫 万葉(四、27・7) 8

「がね」と「がに」 佐伯梅友 学苑(二四・八、

27・9) 6

語法的にみた助動詞「り」の性格 宮田和一郎

国語・国文(三三・九、27・9) 8

莫賣円隣之の訓 尾山篤二郎 国語と国文学

(元・九、27・9) 4

「後」と「復」 佐竹昭広 万葉(五、27・10)

1

舟公宣奴島爾 塚原鉄雄 万葉(五、27・10)

4

万葉の指示語―「その」について― 井手 至

万葉(五、27・10) 9

之麻・也麻小考 八木 毅 語文(七、27・11)

3 舟公宣奴島爾私案 尾山篤二郎 万葉六、28・

1) 1

助動詞「たり」の形成について―「てあり」

と「たり」― 春日和男 万葉七、28・4)

17 露霜攷 武智雅一 万葉(七、28・4) 7

梅花落―ウメノハナチル― 山崎 馨 国語

と国文学(三三・七、28・7) 5

「越野過去」訓義私按 木下正俊 万葉(八、

28・7) 2

「三袖存疑」 佐竹昭広 万葉(八、28・7) 1

「球手折」考 竹岡正夫 万葉(八、28・7) 7

音と光―「玉響」解説の方法― 佐竹昭広

国語・国文(三三・八、28・8) 11

「八多籠」 橋本四郎 万葉(六、28・10) 2

敬語法から見た万葉の旧訓 金田一京助

国学院雑誌(三三・三、28・11) 12

形容助詞の連体法 此島正年 国学院雑誌

(三三・三、28・11) 17

助詞「イ」の性格 武田祐吉 国学院雑誌

(三三・三、28・11) 6

「標野行」考―連用形中止法の一用法―

石坂正蔵 上代文学(三、28・11) 8

万葉集の助詞 林 大 解釈と鑑賞(一八・三、

28・12) 7

万葉集の動詞・助動詞 佐伯梅友 解釈と鑑

賞(一八・三、28・12) 5

万葉誤字 脱字二題 沢瀧久孝 芸林(四六、

28・12) 9

層内韻尾の省略される場合 木下正俊 万葉

(二〇、29・1) 8

手玉鳴裳 佐伯梅友 万葉(二〇、29・1) 2

「ずあり」「ざり」「ず」についての一考察

三吉 陽 愛媛国文研究(三、29・3) 7

「けめかも」攷 木下正俊 国語・国文(三三・

三、29・3) 7

万葉集訓詁一題―「声」と「音」―

馬田義雄 和歌山大学学芸学部紀要Ⅲ人文

科学(29・3) 11

万葉集に見られる数詞について 津留繁雄

不知火(七、29・6) 2

「火氣一如」の訓など 佐竹昭広 万葉(三三、

29・7) 3

同音節反覆の場合の用字法について―万葉集

を中心として 鶴 久 万葉(三三、29・7) 9

奈良時代の又とノの万葉仮名について

大野 晋 万葉(三三、29・7) 24

「紀之許能暮之」考―本文溯原の一つの試み―

井手 至 万葉(三三、29・10) 7

万葉集における助詞「を」 諏訪嘉子 万葉

(三三、29・10) 17

序詞とその限界について―万葉集を中心とし

て― 吉川貫一 国文論叢(二二、29・11) 8

オの万葉仮名 宮島 弘 立命館大学(二五、
29・12) 14
「水鳥二四毛有哉」其他 木下正俊 万葉(四、
30・1) 7
「也」字の訓について―「ぞ」と「なり」の消
長― 春日和男 国語・国文(二四・三、
2) 14
万葉集卷八(一五四六番)の歌の訓み方
菊沢季生 文芸研究(九、30・2) 7
万葉集における「ト」の混乱 三吉 陽
愛媛国文研究(四、30・3) 11
上代の形容詞語尾ジについて 橋本四郎
万葉(二五、30・4) 10
「親魄相哉」について 吉永 登 万葉(二五、
30・4) 7
序詞の地名二題 沢瀉久孝 国語・国文(二四、
五、30・5) 8
「恋無之」訓疑 賀古 明 上代文学(二五、
5) 11
万葉語研究―「新玉のごとき」・「生ひざりし
草」― 佐伯梅友 万葉研究(八、30・5) 3
万葉集読添訓索引―助動詞の部― 蜂矢宣朗
山辺 道(天理大学)(二、30・5) 11
麻乎之多麻敷礼 三宅清 万葉集大成月報
(一八、30・6) 1
万葉仮名の資料―和泉国土塔の文字瓦に就い

て― 生沢英太郎 万葉集大成月報(一八、
30・6) 4
副詞「もとな」について 武田祐吉 国語研
究(三、30・7) 8
いわゆる伝聞推定の助動詞ナリの本義
竹岡正夫 国語・国文(四七、30・7) 5
伝聞推定の「なり」 原田芳起 国語・国文
(四七、30・7) 4
「阿古比須奈牟」私按 木下正俊 万葉(六、
30・7) 5
代名詞「し」について 森 重敏 万葉(六、
30・7) 8
万葉語「ハタ」の周辺 小島憲之 万葉(六、
30・7) 11
万葉集読添訓索引―助詞の部― 蜂矢宣朗
万葉(二六、30・7) 20
「清明」の訓法と解釈 井上 豊 解釈(二、二五、
30・9) 2
「浄」か「浄」か 佐竹昭広 万葉集大成月
報(二〇、30・9) 3
助詞「ばかり」鶏助 福島邦道 解釈(二、二六、
30・10) 2
「足荘殿」と「檀越」 正宗敦夫 万葉(二七、
30・10) 3
埋もれた言語と埋もれた訓詁 亀井 孝
万葉(二七、30・10) 6
「神之諸伏」の訓 伊丹末雄 万葉(二七、30・

10) 2
考えられる訓詁一つ 伊藤 博 万葉(二七、
30・10) 2
「毛無乃岳」の訓 春日政治 万葉(二七、30・
10) 3
「恋故にこそ」 井手 至 万葉(二七、30・10)
4
地庭不落の訓について 山崎 馨 万葉(二七、
30・10) 3
角のふくれ 真鍋次郎 万葉(二七、30・10)
5
上代国語に於ける尊敬・謙讓の表現―万葉集
を中心に― 津之地直一 愛知大学文学論
叢(二、30・11) 46
上代歌謡の句法について 岩橋小弥太 国学
院雑誌(五、四、30・11) 34
誤字説の可否 大野 晋 万葉集大成月報
(二二、30・11) 3
万葉語の活用 林 大 万葉集大成月報(三、
30・11) 3
日本古典文法(一)―その一・係り結び―
大野 晋 解釈と鑑賞(二〇・三、30・12) 9
万葉集読添訓索引―助詞の部―(続)
蜂矢宣朗 万葉(二七、31・1) 20
日本古典文法(二)―その一・係り結び(二)
― 大野 晋 解釈と鑑賞(三・三、31・2) 9
間投副詞から発始としての係助詞へ

- 森 重敏 国語・国文(三三・三) 31・2) 14
 地爾將落八方 三宅 清 国語と国文学(三三・三) 31・2) 9
 万葉集「跡状」の訓について 内川昭子
 愛媛国文研究(三三・三) 6
 「しらぬひ」考 倉野紀子 解釈(三三・三) 31・3) 2
 古今六帖と万葉集―人麿訓点篇― 老川義治
 国語国文研究(三三・三) 31・3) 19
 万葉集読添訓の研究(一) 蜂矢宣朗 天理大
 学学報(七三・三) 31・3) 14
 上代の感動「い」について 瀬良益夫 解釈
 (二四・三) 31・4) 3
 「波の行方」私見 佐藤 稔 解釈(二四・三) 4) 3
 日本古典文法(三)―その一・係り結び(三)―
 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・四) 31・4) 8
 万葉集開卷第一の歌 大野 晋 文学(二四・四) 31・4) 6
 上代敬語動詞成立考 木下正俊 万葉(二九・四) 23
 日本古典文法(四)―その一・「コン」の係り
 結び(四)― 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・五) 31・5) 7
 日本古典文法(五)―その一・「コン」の係り
 結び(五)― 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・六) 31・6) 9
 「広さ」と「狭さ」―上代における連体格助詞
 の用法について― 浅見 徹 万葉(二〇・三) 31・7) 16
 和歌と敬語―その一― 宮田和一郎 解釈
 (二六・三) 31・8) 4
 「の」の歴史―その一として「上代」―
 浅見 徹 国語・国文(五六・三) 31・8) 18
 「あやにかなし」と「見ればかなし」―万葉
 「かなし」考余滴―長江 稔 解釈(二九・三) 31・9) 1
 日本古典文法(六)―その一・「コン」の係り
 結び(六)― 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・九) 31・9) 8
 和歌と敬語―その二― 宮田和一郎 解釈
 (二〇・三) 31・10) 2
 石をたれ見き 阪倉篤義 解釈と鑑賞(三三・一〇) 31・10) 3
 上代特殊仮名遣の万葉集への適用と解釈
 池上積造 解釈と鑑賞(三三・一〇) 31・10) 6
 万葉仮名と中国の字音史 頼 惟勤 解釈と
 鑑賞(三三・一〇) 31・10) 11
 万葉集歌の訓詁をめぐって 小島憲之 解釈
 と鑑賞(三三・一〇) 31・10) 3
 万葉集訓詁新見 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・一〇) 31・10) 2
 万葉らしい訓み方―「極而」の場合―
 清水克彦 解釈と鑑賞(三三・一〇) 31・10) 3
 「腫浪」訓義私按 木下正俊 解釈と鑑賞(三三・一〇) 31・10) 3
 万葉集における「者」字の用法―「中中者」
 の訓をめぐって― 鶴久 万葉(三三・一〇) 31・10) 7
 日本古典文法(七)―その一・「コン」の係り
 結び― 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・一〇) 31・10) 8
 上代の受身・可能・自発の助動詞(一)
 宮田和一郎 解釈(三三・一〇) 31・10) 3
 日本古典文法(八)―その一・「コン」の係り
 結び― 大野 晋 解釈と鑑賞(三三・一〇) 31・10) 7
 古代における格助詞「が」 此島正年 国学院
 雑誌(七七・七) 31・12) 8
 心開而と地爾將落八方との訓み方―大野雅照
 氏・三宅清氏の御教示に答へて― 山崎 馨
 国語と国文学(三三・一二) 31・12) 9
 万葉集読添訓の研究(二) 蜂矢宣朗 天理大
 学学報(三三・一二) 31・12) 14
 上代の受身・可能・自発の助動詞(その二)
 宮田和一郎 解釈(三三・一二) 31・12) 2
 記紀の古さ―格助詞「の」「が」の用法から―
 浅見 徹 万葉(三三・一二) 31・12) 7
 反語について―ヤとカの違いなど―
 阪倉篤義 万葉(三三・一二) 31・12) 12
 万葉集に於ける助詞「と」に就いて

- 松尾久美江 国文学会誌(三、32・2) 4
 「かなし」に関する奈良朝文法―万葉集「かなし」考余滴―長江 稔 解釈(三三、32・3) 2
 万葉集における「令」字の用法 黒岩駒男 久留米文学会記要(二、32・3) 9
 万葉集卷三(二四九番)の歌の訓み方 菊沢季生 文芸研究(三三、32・3) 8
 「思ほゆ」の「ゆ」と動詞「忘る」 宮田和一郎 解釈(三四、32・4) 2
 「来す」と「越す」 木下正俊 万葉(三、32・4) 16
 万葉集の「見」―文体論的考察― 森 重敏 万葉(四、32・7) 31
 発生と完了―「ぬ」と「つ」― 中西宇一 国語・国文(六八、32・8) 17
 義字的仮名に就て―万葉集を中心として― 大野 透 国語・国文(六九、32・9) 14
 古典解釈のための助動詞―未然形に続く助動詞― 佐藤喜代治 解釈と鑑賞(三二、32・11) 25
 古典解釈のための助動詞―連用形に続く助動詞― 中田祝夫他 解釈と鑑賞(三二、32・11) 31
 古典解釈のための助動詞―終止形に続く助動詞― 山田俊雄他 解釈と鑑賞(三二、32・11) 41

- 古典解釈のための助動詞―助動詞はどのような研究されてきたか― 阪倉篤義 解釈と鑑賞(三二、32・11) 6
 万葉集二八七七不恋有登者の訓について―係助詞「なも」の問題― 後藤和彦 文学・語学(六、32・12) 8
 歌語のくさぐさ(四) 宮田和一郎 解釈(四一、32・12、33・1合併号) 2
 「莫響」の歌試論 白子福右衛門 解釈(四三、33・3) 4
 古典解釈のための助詞―格助詞― 土井忠生 解釈と鑑賞(三四、33・4) 23
 古典解釈のための助詞―副助詞― 松村 明 解釈と鑑賞(三四、33・4) 27
 古典解釈のための助詞―係助詞― 白石大二 解釈と鑑賞(三四、33・4) 18
 古典解釈のための助詞―終助詞― 森 重敏 解釈と鑑賞(三四、33・4) 23
 古典解釈のための助詞―接続助詞― 塚原鉄雄 解釈と鑑賞(三四、33・4) 20
 古典解釈のための助詞―間投助詞― 佐伯梅友 解釈と鑑賞(三四、33・4) 7
 「濃」の仮名遣其他 木下正俊 万葉(二七、33・4) 3
 万葉語―その口語性をめぐって― 小島憲之 万葉(二七、33・4) 8
 万葉集「はた」の意味用法をめぐって―附

- 「半手不忘」の解明―井手 至 万葉(二七、33・4) 6
 「わが大王」と「わが大王」 宮田和一郎 解釈(四五、33・5) 1
 蟹の腊 板橋倫行 解釈(四六、33・6) 1
 万葉集卷十四における上代特殊仮名遣の混乱について 江野沢淑子 解釈(四六、33・6) 2
 万葉集卷十四卷十五の仮名について 安田厚子 香推瀉(福岡女子大学)(四、33・7) 8
 佐宿木花 真鍋次郎 万葉(二六、33・7) 3
 万葉集における用字法的一面―「往」「限」の訓との関係において― 鶴 久 万葉(二六、33・7) 7
 万葉集四七番の作品における「葉」の表記 江湖山恒明 和歌文学研究(六、33・7) 11
 「鳥翔成の一試訓 阪口 保 文学・語学(九、33・9) 6
 「らむ」の意味について 尾崎知光 文学・語学(九、33・9) 10
 訓話のこみち 沢瀉久孝 国語・国文(七〇、33・10) 9
 上代国語における母韻調和の吟味―特殊仮名遣オ列音の本質― 北条忠雄 文芸研究(三〇、33・10) 20
 副詞ホトホト(二)の意味構造 井手 至 万葉(二六、33・10) 8

変字法より観たる万葉集の表記法の問題

後 勲 国語・国文(三七・二、33・11) 11

「わがゆゑに」と「わがからに」の考察―万葉集語法の研究― 井上富蔵 岡山大学法文学部学術紀要(二、34・1) 8

万葉集一番の歌の訓方 宮田和一郎 解釈(辛一、34・1) 3

万葉集訓詁註釈史の展望―古点を中心に― 大久保 正 国文学(四一、34・1) 8

「ことば」と「字音仮名」―上代語の清濁を中心に― 橋本四郎 万葉(三三、34・1) 12

「入日哉」其他 大下正俊 万葉(三三、34・1) 12

連体格を構成する助詞二つ 塚原鉄雄 万葉(三三、34・1) 16

万葉集における対句の場合の訓について 鶴久 語文研究九州大学(八、34・2) 12

「まし」の性格―万葉集を中心として― 森井 蘭 女子大国文(京都女子大学)(三、34・2) 9

万葉集第九番試訓 窪田 薫 古典(明治書院)(七、34・3) 1

人麻呂作歌並に歌集の用字 瀬古 確 文学・語学(二、34・3) 17

訓仮名をめぐって 橋本四郎 万葉(三三、34・4) 16

「菅矣奴」考 加地伸行・小島憲之 万葉(三三、34・4) 2

上代語の清濁―借訓文学を中心として― 西宮一民 万葉(四、34・4) 19

動詞「ウラム」古活用臆断 木下正俊 万葉(三三、34・4) 3

万葉集における借訓仮名の清濁表記―特に二音節訓仮名をめぐって― 鶴久 万葉(四、34・4) 13

「落易」の訓など 伊藤 博 万葉(三三、34・4) 3

天字訓詁考 安津素彦 国学院雑誌(二〇五、34・5) 14

皇考―万葉集「皇者神爾之坐者」の「皇」の訓について― 酒井貞三 文学・語学(三三、34・6) 16

用字と用語―大宮之内二手所聞の訓について― 大野雅熙 国語国文研究(三三、34・7) 9

「佐檜の隈み」考 山田弘通 万葉(三三、34・7) 5

「しゝる」「あきじこる」攷 吉田金彦 万葉(三三、34・7) 18

読添へと書添への間―連想的読添へ表記と連想的書添へ表記― 蜂矢宣朗 万葉(三三、34・7) 10

「見所久思」考 西宮一民 万葉(三三、34・7) 3

万葉語のイハバシル・ハシリキ・ハシリダ

34・4) 2

上代語の清濁―借訓文学を中心として―

西宮一民 万葉(四、34・4) 19

動詞「ウラム」古活用臆断 木下正俊 万葉(三三、34・4) 3

万葉集における借訓仮名の清濁表記―特に二音節訓仮名をめぐって― 鶴久 万葉(四、34・4) 13

「落易」の訓など 伊藤 博 万葉(三三、34・4) 3

天字訓詁考 安津素彦 国学院雑誌(二〇五、34・5) 14

皇考―万葉集「皇者神爾之坐者」の「皇」の訓について― 酒井貞三 文学・語学(三三、34・6) 16

用字と用語―大宮之内二手所聞の訓について― 大野雅熙 国語国文研究(三三、34・7) 9

「佐檜の隈み」考 山田弘通 万葉(三三、34・7) 5

「しゝる」「あきじこる」攷 吉田金彦 万葉(三三、34・7) 18

読添へと書添への間―連想的読添へ表記と連想的書添へ表記― 蜂矢宣朗 万葉(三三、34・7) 10

「見所久思」考 西宮一民 万葉(三三、34・7) 3

万葉語のイハバシル・ハシリキ・ハシリダ

井手 至 万葉(三三、34・7) 11

「あさむく」と「日のみかげ」 吉永 登 美夫君志(一、34・12) 9

「愛耶」沢瀉久孝 美夫君志(一、34・12) 3

孤悲―大伴家持の用字― 稲垣富夫 美夫君志(一、34・12) 11

「左手嶋師子について」 佐伯梅友 美夫君志(一、34・12) 4

万葉集訓義私按二題―振痛袖乎・垣盧鳴の攷― 津之地直 美夫君志(一、34・12) 10

「美夫君志」の訓 松田好夫 美夫君志(一、34・12) 18

誤字説をめぐって―「峯(峰)と岫(岬)」の場合― 西宮一民 万葉(三三、34・1) 9

正訓字の整理について 池上禎造 万葉(三三、34・1) 7

万葉語彙の構造―その一― 名詞について― 阪倉篤義 万葉(四、35・1) 11

万葉集第十五番の歌「渡津海乃……清明己曾」のよみについての私見 亀井 孝 万葉(四、35・1) 6

万葉集における敬語 佐伯梅友 国文学(五二、35・2) 6

万葉集における活用語尾の表記―動詞の部― 蜂矢宣朗 山辺 道(六、35・3) 16

「侍り」について 小野志真男 国文学攷(三三、35・4) 8

「等乃斯久」考 佐藤 稔 国文学攷(三、35・4) 6

万葉長歌に於ける枕詞の位相と機能

松田芳昭 国文学攷(三、35・4) 9

万葉集巻五の音仮名について(上) 一億良の

音仮名用字圈 稲岡耕二 国語と国文学

(三七・六、35・6) 15

万葉集巻五の音仮名について(下) 一億良の

音仮名用字圈 稲岡耕二 国語と国文学

(三七・七、35・7) 15

「しこる」「あきじこる」の周辺 原田芳起

万葉(三、35・7) 8

人麻呂歌集訓詁二題 鶴 久 語文研究(二、35・9) 7

「安良我伎麻由美」新考 賀古 明 美夫君志

(二、35・9) 13

完了の助動詞「り」と「く語法」津之地直一

美夫君志(二、35・9) 7

万葉岡目八目 倉野憲司 美夫君志(三、35・9) 6

「世中常如」と「半手不忘」の訓義 津之地直一

美夫君志(二、35・9) 8

完了の助動詞「り」と「く語法」津之地直一

美夫君志(二、35・9) 7

「打布裳」の訓について 蔵中 進 万葉(七、35・10) 5

上代特殊仮名遣入門 大野 晋 解釈と鑑賞

(二六三、36・2) 38

万葉集の語法と訓釈 木下正俊 解釈と鑑賞

(二六三、36・2) 24

万葉集重要語句の詳解 井手 至他二名

解釈と鑑賞(三三、36・2) 136

万葉集における情態副詞と副助詞について

寺崎 蘭 女子大國文(二〇、36・2) 8

係りか、言い切りか―「か」の場合―

佐伯梅友 武蔵野文学(八、36・2) 4

今敷者見目屋跡念之 橋本四郎 美夫君志(三、36・3) 8

万葉集から古今集へ―序歌に見られる修辭の

流れの一端― 服部喜美子 美夫君志(三、36・3) 15

万葉語に於ける一音節接頭語―い・か・こ・

さ・た― 津之地直一 美夫君志(三、36・3) 6

万葉「かなし」考 長江 稔 解釈(七五、36・5) 7

万葉集の枕詞「霰零」「九雪降」はアラレフリ

かアラレフルか 福田良輔 語文研究(二三、36・10) 5

「具フ」の仮名遣をめぐって 西宮一民 万葉

(四一、36・10) 11

「更」の原意考 今井福治郎 万葉集研究(万

葉西会)(六、36・10) 10

万葉「かりばか」雑考 扇畑忠雄 美夫君志

(四、36・10) 9

万葉語に於ける一音節接頭語―ま・み・や・

ゆ・を― 津之地直一 美夫君志(四、36・10) 7

古代日本語における名詞の構成 阪倉篤義

国語・國文(三三・二、36・11) 22

東歌及び防人歌の用字に就いて 水島義治

国語国文研究(三〇、36・12) 39

万葉集の訓詁(一) 三宅 清 国文学(七一、37・1) 4

所謂形容詞のかり活用及び打消の助動詞ザリ

について―特に万葉集における義訓すべき

不安・不遠・不近・不悪・不有をめぐって

― 鶴 久 万葉(四三、37・1) 20

ミの形をめぐる問題 橋本四郎 万葉(四三、37・1) 15

万葉語に於ける二音節接頭語 津之地直一

愛知大学文学論叢(開学十五周年記念特輯)

(三三、三合併号、37・2) 23

「猿二鴨似」の訓 武智雅一 愛媛国文研究

(二一、37・2) 6

万葉集の訓詁(二) 三宅 清 国文学(七三、37・2) 2

万葉弟世考 市村 宏 歌と評論(三三、37・3) 3

万葉集巻五訓詁存疑私見 古沢未知男 熊本

女子大学学術紀要(四四、37・3) 10

枕詞「飛鳥」四音考 金井清一 国語と国文学 (元三、37・3) 10
 万葉集の訓読(三) 三宅 清 国文学(七、四、37・3) 4
 万葉集読添訓の研究(四) 蜂矢宣朗 天理大学学報(三三、37・3) 13
 万葉集二四一八歌「何名負神」の試訓(一) 福沢武一 歌と評論(三三、四、37・4) 2
 仮名表記と読添へ 蜂矢宣朗 万葉(四三、37・4) 16
 治者 木下正俊 万葉(四三、37・4) 2
 動詞の接辞化―万葉の「行く」と「来」― 井上展子 万葉(四三、37・4) 11
 万葉集二四一八歌「何名負神」の試訓(二) 福沢武一 歌と評論(三三、五、37・5) 2
 「遠く見へくあらましものを」 沢瀉久孝 上代文学(三、37・5) 2
 万葉集二四一八歌「何名負神」の試訓(三) 福沢武一 歌と評論(三三、六、37・6) 1
 朝羽振る風夕羽振る浪―その表現―井手 至 大阪市立人文研究(三三、五、37・6) 14
 玉杵考 久保昭雄 白路(七七、七、37・7) 3
 枕詞クサマクラの生成 松田芳昭 国語と国文学(三六、八、37・8) 11
 「万葉集」開巻第一の歌をめぐる 益田勝実 解釈と鑑賞(三二、二、37・9) 2
 助詞「し」の説―係機能の周辺― 川端善明

万葉(四三、37・10) 13
 田辺福麿之歌集と五つの歌群―その用字を中心として― 古屋 彰 万葉(四三、37・10) 11
 「イツチ」をめぐる 白藤礼幸 上代文学(三、37・11) 4
 万葉集の義訓をめぐる 鶴久 香椎瀧(六、37・12) 10
 「玉之浦ノ」存疑 蜂矢宣朗 山辺 道(六、37・12) 9
 万葉語に於ける接尾語 津之地直一 愛知大学文学論叢(三三、38・2) 28
 万葉集卷十四の用字に就いて 瀬古 確 熊本大学教育学部紀要(二、38・2) 11
 万葉集短歌の構造(その五) 安良岡康作 国文学(六三、38・2) 7
 上代人の表記意識と用字法―特に万葉集における表記の省略される場合― 鶴久 熊本女子大学学術紀要(二五、一、38・3) 18
 伊縁立之 中西 進 成城万葉(一、38・3) 4
 万葉集卷二十防人歌の清濁表記―その用字法的背景― 森山 隆 文学論輯(二〇、38・3) 26
 助詞「も」の説―文末の構成― 川端善明 万葉(四三、38・4) 15
 詞林抄―『ことのかたりごと』の系譜―を讀んで― 橋本四郎 女子大國文(二六、38・5) 3

「蔵公之」の試訓 竹内金治郎 語文(日大)(二五、38・6) 11
 石垣洵の隠り(承前) 賀古 明 美夫君志(六、38・6) 10
 故・姪考 小島憲之 美夫君志(六、38・6) 4
 「痛寸取物」試訓 大野 保 美夫君志(六、38・6) 8
 万葉語に於ける数詞・助数詞及び漢数字の用字法(一) 津之地直一 美夫君志(六、38・6) 8
 「万葉考」に於ける訓研究について 河野頼人 美夫君志(六、38・6) 10
 万葉用字法上に於ける漢文的なるもの 瀬古 確 不知火(二五、38・7) 7
 万葉集に見える訓仮名をめぐる 瀬古 確 不知火(二五、38・7) 7
 許氏多受久母可 橋本四郎 万葉(四六、38・7) 4
 助詞「も」の説―二、心もしのに鳴く千鳥かも― 川端善明 万葉(四六、38・7) 18
 石橋と岩橋 井手 至 万葉(四六、38・10) 6
 「所依」所縁」試論 木下正俊 万葉(四六、38・10) 13
 万葉集の訓仮名について―卷十一、卷十二を中心にして― 稲岡耕二 武庫川女子大学紀要(二二、38年度) 25

- 「あれをとめ」考 土橋 寛 万葉(五、39・1) 10
- 「はばき」 橋本四郎 万葉(五、39・1) 6
- 万葉集に於ける「可」「応」字の用法 鶴 久 万葉(五、39・1) 7
- 万葉集一三・三二六八の歌の「思」の訓をめぐって 本田義寿 論究日本文学(三、39・1) 11
- 万葉集卷十三表記年代考―借訓文学を中心に― 稲岡耕二 国語と国文学(四・三、39・2) 18
- 音訓両用の仮名について 稲岡耕二 万葉(五、39・4) 11
- 新撰万葉集の用字―基礎作業として助詞の表記について― 浅見 徹 万葉(五、39・4) 20
- 万葉集「行年考」 大久保 正 上代文学(二、39・6) 7
- 万葉集に於ける用字の視覚性(一) 瀬古 確 日本文学(三・六、39・6) 12
- 君が名はあれど吾が名し惜しも―「はあれど」非反戻の説― 川上徳明 美夫君志(七、39・6) 13
- 上代における特殊仮名遣と発音―万葉歌を訓むために― 伊丹末雄 美夫君志(七、39・6) 7
- 上代の疑問詞について―タレソの場合― 富
- 田大同 美夫君志(七、39・6) 9
- 竹取翁歌の用字の年代―借訓仮名を中心に― 稲岡耕二 美夫君志(七、39・6) 18
- 「ぢ」について 石田 肇 美夫君志(七、39・6) 14
- 卷十三訓詁私按 沢瀉久孝 美夫君志(七、39・6) 4
- 万葉集に於ける用字の視覚性(二) 瀬古 確 日本文学(三・七、39・7) 8
- 「なり」の表記の意味するもの―万葉集について― 田島光平 万葉(五、39・10) 11
- 「溢す」と「毀つ」―黄葉片々― 木下正俊 万葉(五、39・10) 4
- 万葉集の解釈―語法を基礎として― 宮田和一郎 国文学(六・四、39・11) 6
- 万葉集講話(一) 沢瀉久孝 万葉(一、26・10) 6
- 万葉集講話(二) 沢瀉久孝 万葉(二、27・1) 6
- 万葉集講話(三) 沢瀉久孝 万葉(三、27・4) 12
- 万葉集講話(四) 沢瀉久孝 万葉(四、27・7) 7
- 万葉集講話(五) 沢瀉久孝 万葉(五、27・10) 9
- 万葉集講話(六) 沢瀉久孝 万葉(六、28・1) 7
- 万葉集講話(七) 沢瀉久孝 万葉(七、28・4) 7
- 万葉集講話(八) 沢瀉久孝 万葉(八、28・7) 7
- 万葉集講話(九) 沢瀉久孝 万葉(九、28・10) 8
- 万葉集講話(十) 沢瀉久孝 万葉(一〇、29・4) 8
- 万葉集講話(十一) 沢瀉久孝 万葉(一一、29・7) 8
- 万葉集講話(十二) 沢瀉久孝 万葉(一二、30・1) 6
- 万葉集講話(十三) 沢瀉久孝 万葉(一三、30・4) 4
- 万葉集講話(十四) 沢瀉久孝 万葉(一四、30・7) 4
- 万葉集講話(十五) 沢瀉久孝 万葉(一五、31・4) 4
- 万葉集講話(十六) 沢瀉久孝 万葉(一六、31・6) 6
- 万葉集講話(十七) 沢瀉久孝 万葉(一七、31・7) 6
- 万葉集講話(十八) 沢瀉久孝 万葉(一八、32・10) 6
- 万葉集講話(十九) 沢瀉久孝 万葉(一九、32・1) 5
- 万葉集講話(二十) 沢瀉久孝 万葉(二〇、32・4) 5

7) 7

万葉集講話(二十二) 沢瀉久孝 万葉(二六

33・1) 5

万葉集講話(二十二) 沢瀉久孝 万葉(三三、

34・4) 5

三 解釈・鑑賞

麻里布浦行之時歌(万葉集選釈) 久松潜一

解釈と鑑賞(二・一、21・1) 2

見わたしの近きわたりを 佐伯梅友 文学

(二四・二、21・2) 8

「吾妹」考(上) 武田祐吉 短歌研究(三三、

21・3) 4

「吾妹」考(下) 武田祐吉 短歌研究(三三、

21・4) 4

万葉集釈評(一) 久松潜一他八氏 解釈と鑑

賞(二五、21・5) 5

万葉集釈評(二) 久松潜一他八氏 解釈と鑑

賞(二六、21・6) 4

藤浪乃直一目耳考 尾崎暢映 短歌研究(三三、

二六、21・6) 5

万葉集釈評(三) 久松潜一他八氏 解釈と鑑

賞(二七、21・7) 4

己津物考 石垣謙二 文学(四七、八合併号、

21・7、8) 5

万葉集釈評(四) 久松潜一他八氏 解釈と鑑

賞(二八、21・8) 6

万葉集釈評(五) 久松潜一他八氏 解釈と鑑

賞(二九、21・9) 7

万葉集釈評(六) 久松潜一他八氏 解釈と鑑

賞(二二、21・11) 5

三山歌私見 沢瀉久孝 国語・国文(六六、

22・1) 21

妹に触れば吾にも触れなむ 沢瀉久孝 国語

・国文(六四、22・7) 8

雲のみわやま 土岐善麿 短歌研究(五三、23・

3) 5

泣く児守る山 五味保義 解釈と鑑賞(三三、

四、23・4) 4

「風をだに恋ふるはともし」 沢瀉久孝 短歌

研究(五四、23・4) 6

歌謡問題歌詞考 志田延義 国語と国文学

(三五三、23・12) 3

万葉の解釈 三宅 清 国語と国文学(六六、

二、24・2) 6

「沖へなざかり」 三宅 清 解釈と鑑賞(四四、

七、24・7) 3

万葉集に於ける情調美の胚胎 本林勝夫 文

芸研究(一、24・7) 9

万葉難語私見 丹野 正 日本文学研究(五、

24・10) 5

「みどりご」歌 菊沢季生 文芸研究(二、24・

10) 4

千鳥鳴なりつまつちかねて 沢瀉久孝 国語・

国文(九二、25・9) 3

「あすは来むとし云いてしか」 沢瀉久孝

説林(二九、25・9) 4

ヒト・ヲノコ・マスヲヲ一 万葉集私注覽書一

土屋文明 文学(八九、25・9) 5

秋山われは一 心情表現の構造を中心に一

犬養 孝 語文(一、25・11) 10

「西の市にたゞひとり出て」の歌に対する私見

馬田義雄 学芸研究一 人文科学一 (和歌山

大学学芸学部)(一、25・12) 16

万葉集「本名言」考 吉永 登 国語・国文

(二〇一、26・1) 6

万葉集在註「鶴鷗」私案 木船正雄 国語・

国文(二〇一、26・1) 5

疑問文か平叙文か 佐伯梅友 日本文学教室

(八、26・3) 7

万葉集四二五番の左註について 井上富藏

文芸と思想(福岡女子大学)(三、26・7) 6

「やすみし」考 源 豊宗 芸林(三四、26・

八) 8

往左来左君社見良目 尾登よしゑ 万葉(一、

26・10) 6

彼方の赤土少屋にこさめふり 木下正俊

万葉(一、26・10) 8